

# 霞の海原に ゆらめく三角帆



エビの尻尾のように根室水道に突きだした野付半島に囲まれた浅い湾が尾岱沼である。野付風蓮道立自然公園に含まれている。この浅い湾では打瀬舟（うたせぶね）という特殊な帆掛け舟がホツカイシマエビ獲りに使われている。水深が浅くて、しかもアマモなどの海藻が多い湾ではスクリューが使えないので帆を使う漁法が考えられた。帆掛け舟は海藻や海藻を傷めないから、それらを食料とするハクチョウなどの保護のためにも意義は大きい。

尾岱沼を囲む野付半島はごく低い砂嘴（さし）で、その先端部にはかつて集落もあったというが、年々砂州が沈下し続けて、今ではトドワラ（楸原）と呼ばれたトドマツの枯木の立ち並ぶ景観も少なくなってしまった。これは少々寂しいが、一風変わった荒々しい光景で有名だった。

砂嘴の付け根近くオンニクルにあるナラワラ（楸原）が辛うじて残っていて面白い風景をみせているが、樹形の点ではトドマツなどの針葉樹に比べると凄みがなくて到底、及ばないのが惜しい。このナラワラも地盤沈下や湾内流の浸食による海水の侵入での立ち枯れである。

砂嘴の岸边や潮溜まりにはアッケシソウ

（サンゴソウ）、ウシオツメクサ、ウミミドリ、オオシバナ、ハマシオンなどの塩生植物の群落がある。砂州にはハマナス群落が広くみられるほか、チシマフウロ、エゾフウロ、オオハナウド、エゾリンドウ、キバナノカワラマツバ、サワギキョウ、チシマアザミ、トウゲブキ、シコタンタンポポ、キオン、エゾカンゾウ、クロユリ、クルマユリ、マイズルソウ、カラマツソウ、センダイハギ、ハマニンニク、ハマベンケイソウ、クサフジ、エゾカワラナデシコ、コケモモ、ガンコウランなどがいわゆる原生花園を作り上げている。一部にはミズゴケをとまなう淡水の湿地もあって、そこにはツルコケモモ、ムジナスゲ、チシマガリヤス、ナガボノシロワレモコウなどがみられる。

湾内は波が静かでほとんど湖に近い環境だからオオハクチョウ、オナガガモ、マガモなどもやってくるし一部は越冬もする。日本では数少ないアカアシシギの繁殖地でもある。海岸草原にはユキホオジロ、シマアオジ、ノゴマ、ヒバリ、ベニマシコ、オオジュリン、シマセンニュウ、ハクセキレイ、センダイムシクイがみられる。

砂嘴は付け根から先端まで26kmある。これは砂嘴としては日本で一番長い。根室水道に